



# 福島支部会報 35号

## 日本山岳会福島支部

(令和3年7月から9月の活動)

令和3年(2021年)10月15日発行

公益社団法人日本山岳会福島支部

支部長 佐藤 一夫

事務局 〒960-8133 福島市桜木町13-43

渡部 展雄 気付

電話(FAX) : 024-533-0541

携帯 : 090-2880-9805

### 新型コロナ感染と支部活動

令和3年9月30日、新型コロナウイルス緊急事態宣言と蔓延防止重点地域指定が解除され、感染激減で世情は落ち着きを取り戻しつつある。

7～9月中の支部活動を振り返ると、公益活動や定例山行のほか、恒例行事として取り組んできた「山の日親子登山」も2年連続中止となった。

こうした中、支部は、令和7年(2025年)に創立120周年を迎える日本山岳会が、その記念事業として120か所の「山岳古道」調査提案を受け入れ、全力で取り組む決意を固めた。向後4年間、県内数か所の古道を選定・調査し、歴史に埋没しつつある山岳古道を全国の山仲間と一緒に掘り起こしたいとの決意である。

幸い県内には多くの峠道がある。「八十里越」、「六十里越」、「旧沼田街道」、「会津中街道(大峠)」、「万世大路」、「太閤道」等々。7月以降支部は三役会議、現地自治体や県機関、環境省、森林監督署等に協力要請を行い、数回の現地調査を進め、協力と賛同を戴いた。詳細は後述するが支部会員、支部友の改めてのご支援をおねがいします。  
事務局渡部展雄記

### 支部活動報告 (2021年7月～9月)

#### 支部事務局に寄せられた活動報告

9月20日、三春町居住深谷茂会員から、支部事務局に珍しい画像が寄せられました。深谷会員は大学山岳部時代、厳冬の剣・早月尾根登攀はじめ“三春にこの人あり”と知られた岳人です。以下メール全文掲載。



ご無沙汰のほど、ご容赦ください。

昨日、10年ぶり(御嶽山の爆発日以来)に御神楽沢に足を運びました。

下流域の釣りが主目的の遊びのため、笠倉沢出合で納竿でした。支部の皆さん達が活動している奥壁までは時間切れで届きませんでした。

昭和40年代後半から50年代前半にかけて「新潟山の会?」に触発されて御神楽岳の壁・尾根・沢に夢中になっていた当時が懐かしい場所です。

会員の皆様には珍しくないかも知れませんが、御神楽沢で「山の赤いバナナ」に初めてお目にかかりました。(写真添付)

全国14都道府県で絶滅危惧種に指定されているラン科ツチアケビ属「ツチアケビ」だそうです。その感動のあまりメールした次第です。

(笑)

深谷 茂 拝

### 江花俊和会員による会津百名山踏破記録

8月、江花俊和会員から18ページの下記冊子と便りが届けられました。55年に及ぶその軌跡を紹介します。

#### 南会津の山に魅せられて55年



拝啓

暑いと言っているうちに立秋となりました。七十二候の初候「涼風至(すずかぜいたる)」で「いつの間にか訪れていた秋の気配」だそうです。猛暑とコロナ禍で活動中止を余儀なくされていて困ったものですね。私事ですが、若いころから好きで歩いていた会津の山ですが、去る8月1日に前山・惣山の前山を登って『会津百名山』を登り終えましたので報告します。支部会報の原稿になればと、、、

～以下省略しました。ご容赦を～



令3年8月1日江花氏を囲み山仲間が踏破を祝福

「会津百名山」から抜粋した記事の紹介

- ① 私と登山・南会津の山へのきっかけ～山への原点  
初めての山は小三の時の磐梯山。戦争で負傷した人々を父が案内し、義足や義手で登っている姿と顔をくしゃくしゃにして喜んでいたので覚えている。磐梯山はいいな～と思い、山にのめりこむ原点だったのかも。

## 支部の山岳古道調査9月末までの活動

### 山岳4 古道調査の現状と進捗状況

JAC 創立 120 周年記念「山岳古道調査(前半)」は下記 4 古道を選定、7 月から本格調査開始した。

これまでの調査結果と今後の計画は下記の通り。

- 1 沼田・会津街道～9/26(日)現地調査入山、ほぼ完了
- 2 大峠(会津中街道)～9/28(火)現地調査入山、継続
- 3 八十里越～10/16(土)、10/17(日)現地調査入山予定
- 4 六十里越～10/30(土)現地調査入山予定

福島支部の古道調査第一弾は、7 月 14 日(水)、「八十里・六十里越」の地元・只見町役場に対する趣旨説明と協力要請からスタートした。この事業は、関係自治体、関係機関、さらに地元で活動する「古道を守る会」関係者との協力が不可欠であり、以下、時系列に従ってこれまでの取組結果を報告します。

### 7.14 只見町役場副町長への協力要請ほか

八十里越古道に詳しい地元只見町居住の支部員 2 名と佐藤支部長ほか 3 名が、町役場を訪問、副町長ほか役場幹部に対し、本記念事業の趣旨説明を行った結果、調査協力する旨の返事を頂く。

さらに、鈴木章一会員宅にて「八十里越」と「六十里越」の調査をどのように進めるかの検討を行った。

画像は鈴木会員提供木の根小屋(唯一現存する風景) 昼食後は下郷町に移動、大峠(会津中街道)の林道などを下見して終了。

実施者～鈴木章一会員 長谷部忠夫会員 佐藤支部長、小林顧問、青柳会員、事務局渡部、以上 6 名



八十里越県境「木の根小屋」

### 8.17 下郷町、桧枝岐村役場訪問と現地調査

午前中、下郷町会津中街道実行委員長・佐藤淳一、同町歴史の道ガイド・小椋勝美宅を訪問、今後の現地調査日程のツメとともに大峠復活作業の現状を聴取。

午後は桧枝岐村役場を訪問、観光課係長に対し「旧沼田街道」調査への協力要請実施。さらに同席した星守桧枝岐村村議からも積極的な協力姿勢を得ることができた。桧枝岐村では沼田街道の巨木群を“今後の観光の目玉”として宣伝開発する方針であり、全面支援の姿勢を示したてくれた～実施者：事務局渡部

### 9.7 支部4 役会議開催



10:00～あだち道の駅において支部4 役会議開催。議題は山岳古道 4 か所について、支部 PT の体制確立、関係機関への協力要請、地元古道を守る会との連携、調査日程等について協議・決定した。

2 座目は昭和 36 年、高 3 夏休みのとき今は亡き親友との飯豊山、3 座目は玉川機械金属若松工場(後の三菱伸銅)に入社した時に登った安達太良。本社転勤で槍・穂高や八ヶ岳など。S43 年、23 歳で会津へ戻り、最初に登った残雪の小幽沢からの会津朝日岳で身も心もずたずたにされた。南会津の山にはまった最初の山だった。

### ② 会津百名山と私のあしあと

「会津百名山」が出版された H10 年には会津の山を歩いて 33 年、70 座はすでに登っていた。一人でぼつりぼつりと登って 81 座になった 2 年前から、山友が協力を申し出てくれて今年 8 月 1 日に前山山頂で大勢の仲間が「会津百名山」達成を盛大に祝ってくれた。



磐梯山にて (S46.3.28)



尾瀬沼の蒸気船に乗る(S43.7.25)



木道がなかった田代山(S43.9.23)



田代山弘法小屋 S43.9.23



大戸岳山頂 S48.5.13

ダム(現・若郷湖)に沈む会津桑原集落の女子高校生。彼女たちは山頂で、「これから就職帰省しても生まれ育った村がなくなる」とさみしげに語っていた。

### 江花会員「会津百名山」全山踏破達成の感想

- ① 前述した会津朝日岳をきっかけに S40 年代は会社の山岳部で休日毎に南会津の山に通い、5、7、8 月の連休は縦走、沢登りだった。北アにはない山と、里と、人にも魅かれた。南会津を主に会津の山を歩き、気づいたら 170 座になっていた。狙っていたわけではなかったのでここまで 53 年かかった。
- ② 私が百名山を達成できたのは多くの山仲間にも恵まれ、仲間との山行の積み重ねの結果だからいくら感謝してもし切れない。百名山達成の山頂で、大勢の山仲間にも恵まれ、山をやっていてよかったとしみじみ思った。
- ③ この歳まで登り続けて来たのはなんだったのかをあらためて考えている。結論は出なくていい、これからはゆっくり楽しみながら登り続けたい。



百名山達成前の腹こしらえ



みんなで横断幕作成

## 9.13 下郷町、桧枝岐村役場訪問と現地調査

09:00 から、下郷町居住歴史の道ガイド(小椋)宅、会津中街道実行委員長(佐藤)宅を訪問、今後の現地調査の進め方を協議。その後、役場観光課において調査協力を申し入れ。

午後は桧枝岐村役場を再度訪問、観光課長に「旧沼田街道」調査への協力要請実施。さらに同席した星 守桧枝岐村村議からも積極的な協力姿勢を得ることができた。

桧枝岐村は、沼田街道整備を新たな村起こし事業として取組んでおり「山岳古道120選」記念事業と目的が一致、支部現地調査には全面協力を確約した。

実施者：菊池副支部長、小林顧問、青柳会員、事務局渡部の4名



写真 ①上は桧枝岐役場観光課長らと ②左下は村内尾瀬ミュージアムで星村会議員と懇談。③右下は武田久吉 JAC 6代目会長の肖像。植物学者で、尾瀬など県内の山に大きな功績を残し、村民に今も親しまれている

## 9.26 [旧沼田街道(七入峠)]現地調査

9/25(土)全員が桧枝岐村議星守氏経営の旅館「ますや」に一泊。翌9/26(日) 08:30 七入り駐車場集合。この日の調査は2班に分け、①班は七入から沼山休憩所まで登りコース担当。②班が沼山休憩所～沼山峠まで往復～沼山休憩所～七入駐車場まで下りの現地調査実施。参加者は桧枝岐村差し向けのマイクロバスで移動。

調査の基本は、スマホアプリ「YAMAP」のGPS機能を駆使、ルート上の正確な距離、緯度・経度をデータ化、これを本部 PT が全データを集約する方法で行い、各人が独自に習得した技術を実践した。沼田街道調査は15:15問題なく終了。

調査メンバー ①班登山組 佐藤支部長 小林顧問 幕田会員 大島会員の4名 ②班下山組 菊池副支部長 青柳、石井、佐藤(憲)、熊谷、佐久間会員 渡部事務局の計7名



沼山休憩所前で村役場星さんと



抱返りの滝

## 9.28 会津中街道(大峠)現地調査



写真 ①左は「野際新田宿」の前で撮影、中央が宿末裔の星さん。②右は上から街道始点の野沢一里塚(友会員渡邊氏) 右中段は街道に架かる橋の石組み 右下は街道口留番所屋敷跡の土台石  
実施者=小林顧問 菊池副支部長 渡邊尋元(友会員) 渡部



江戸時代の参勤交替街道として栄えた会津西街道(現国道121号線)が下野国(栃木県)五十里地方で発生した大規模地震により通行不能となったのを機に会津中街道(大峠)が新たに開削された。開削後は江戸への近道、また塩の道として賑わいを見せ、幕末戊辰の役では会津藩討討の西軍が進軍した街道でもある。明治期、三島県令の「会津三方道路建設」以降は年とともにすたれ、以降、三斗小屋温泉湯治客が細々利用していた。昭和期は旧街道と並行し現在使われている森林切り出し目的の林道が整備され、旧中街道は通行する人もなく歴史に埋もれようとしている。

今回の調査は9/28(火)08:30 から、下郷町居住小椋勝美(ガイド)と町役場観光課長(自主参加)の案内で実施、街道の60%・約8kmを踏査、15:30 終了した。残り40%の調査は来年度以降に実施する予定。

会津中街道は「下郷町会津中街道実行委」佐藤淳一氏が孤軍奮闘してその復活と整備に取り組んでいる。

広葉樹林に囲まれた街道には野仏、石碑など多数現存。



### 事務局からのお知らせ

### 今後の山岳古道調査三街道について

古道調査本部 PT による福島支部第2次調査対象は、以下の3街道が候補として挙げられました。現地調査は来年度以降に実施します。

- ① 太閤道～豊臣秀吉が戦国時代奥州仕置きで通行
- ② 万世大路～福島市と米沢市を結ぶ明治開鑿の古道
- ③ 旧会津西街道～英人女性探検家イザベラが世界に紹介

### 新入会員の紹介

10月1日付で福島市居住の鈴木弘晃氏(63歳)の入会が認められました。鈴木氏は元福島県警察間で、プロフィール等は次号で紹介します。

## 遭難碑のこと (大正15年9月福島女子師範生など4名の殉難死)

6823 逸見征勝氏 寄稿

OB仲間たちと一緒に、それぞれの趣味の作品を持ち寄って毎年展覧会を開催し総会とか新年会を開催している。今年会場におもいがけなくAさんが来た。仲間の知人が付き添っていた。

Aさんは日本山岳会の先輩だ。しかし、一緒に山に登ったことはなく、総会とか新年会で顔を合わせた程度だったかもしれない。大正生まれで87才になったというAさんは元気そうで、絵や陶器、写真、工芸などを眺めていた。同じ山岳会にしながら登山に同行した記憶がないAさんが印象に残ったのはこうである。約10年前、山岳会は創立50周年を迎えて記念誌を出版した。内容は山岳会の歴史のほか、会員の自由なエッセイを掲載した。Aさんは、吾妻山で遭難して亡くなった父の慰霊碑を毎年のように訪れて焼香をしていたが、体力が衰えていつまで続けられるかわからないと書いていた。私は記念誌の編集委員を務めていた。何度か校正をするうちに、Aさんの文が強く心に残っていた。

遭難は一切経山の北にある五色沼のほとりで発生した。近年、そのあらましを特集した新聞の切抜きによると、遭難で死亡したのは吾妻登山を恒例行事とした福島女子師範(現福島大学)の生徒と案内人など4名である。

大正15年9月17日、福島女子師範の2年と4年の生徒138人は、教師や案内人などを伴って高湯温泉を出発した。天候は曇りだったが、途中から風雨が強まった。生徒が身に着けていた雨具は油紙、履物はわらじ程度だったらしい。これでは山の寒さをしのげるはずはなく中止の声もあったが、登山は続行された。

五色沼のほとりに達したとき、風雨は一段と激しくなった。ここは山と山にはさまれ、雨樋の底のような地形のせいか風の通り道となっている。ついに生徒は高湯温泉に引き返し、一部は山を越えて微温湯(ぬるゆ)温泉に下った。しかし疲労などのために下山できなかった生徒と案内人ら4人は、翌日遺体となって発見された。Aさんの父は案内人だった。そばには愛犬が寄り添っていたと新聞に記されている。気象激変した原因は、17日上陸した台風であった。慰霊碑は翌年に市内の青年団の奉仕作業などで建立されたと伝えられる。

会場でAさんから焼香は止めていると聞いた私は、今年はその日に合わせて慰霊碑へ行ってみたいと思った。そして平成20年9月17日、あの遭難から90年近い日が流れた。酸ヶ平から咲き残ったリンドウを見ながら登っていく。気温は少し高いが空は晴れ、秋らしいひつじ雲が浮いていた。

五色沼へは一切経山の頂上から30分ほど下らな

ければならない。下った分、焼香の帰りには上りとなるため、最近では辛く感じるとAさんは10年前の記念誌に書いていた。慰霊碑の前には誰かが置いていったのか古い酒カップが残っていた。きっと縁のある人が訪ねてきたのだろう。それを水で洗い、近くに咲いていたリンドウを1本入れて供えた。

碑には「福島女子師範生遭難の碑」ときざまれている。裏にも文がきざまられていたが、石が風化して読むことはできなかった。碑に水をかけ、子供のころに覚えた舎利礼文を唱えた。お経の意味はわからないが、臨済宗でも曹洞宗でも焼香の際に唱えられるお経である。たしか、彼岸の供養や施餓鬼でも檀家と住職と一緒に唱えている。

慰霊碑には懐かしい思い出がある。高校生のときに初めて吾妻山に登った。登山好きの先生に連れられ、一切経山を経て高湯に下る途中のことである。白い石楠花が供えられた慰霊碑を前にして先生が建てられた由来を説明してくれた。帰ってから「しゃくなげや 亡き学生の 碑ににおう」という俳句を詠んだ記憶がある。

しばらく休んでいると、五色沼の東の岸から霧が西へ流れはじめた。青い水面の上を次々に渡ってきた霧は岸に着くと風にあおられて消えていく。不意に大きな封筒のような霧が現れた。ゆっくりと沼を渡り切った霧は、岸近くの慰霊碑の30mほど手前でびたりと止まった。おどろいて立ち上がった私は動こうとしない霧を見つめた。「霧が麓から4人の霊を入れてここまで運んできた」と思った私は、再びお経を唱えはじめた。真剣であった。しばらくすると、霧はほぐれるようにして消え去った。

(平成20年11月記)

